

フリーターの労働観に関する一研究

富澤文江

I 問題と目的

ここ最近、これまでの“新規学卒就職”という慣行からはみ出した、フリーターの著しい増加に社会的関心が集まっている（乾、2001）。

そもそも「フリーター」という言葉は、1987年にリクルート社のアルバイト情報誌『フロム・エー』が創ったものであり、当時はいわゆる一般企業に就職しないで自分の夢を追いかける人＝フリーターという意味づけをしていた（2000、エコノミスト）。『労働白書（平成12年度版）』では、フリーターを年齢は15～34歳と限定し、①現在就業している者については勤め先における呼称が「アルバイト」又は「パート」である雇用者で、男性については継続就業年数が1～5年未満の者、女性については未婚で仕事を主にしている者とし、②現在無業の者については家事も通学もしておらず「アルバイト・パート」の仕事を希望する者と定義している。しかし、人々の認識としては、フリーターという言葉には動機や印象、評価の視点が織り込まれているふしが強く、定義は曖昧なままで、イメージが先行した状態にある。このことは、フリーター像を見にくくするとも言えるし、逆にここまで人々に関心を持たれるようになった由縁でもあると考えられよう。

近年の日本の雇用状況は大きな動きをみせており、終身雇用や年功序列といったシステムの崩壊が顕在化されていった。そのような社会的背景の中でフリーターは増加し続け、ひとつの労働者層として人々に認識されるようになっていった。そして、このフリーターという労働形態の登場は、人々に多くの関心を抱かせ、働くことへの問い合わせあらためて考える一つのきっかけになったのではないだろうか。

フリーター研究はまだ始まったばかりであるが、日本労働研究機構（2000）は、ヒアリング調査からフリーターの類型化を行い、同じフリーターといえども、「やむをえず型」「夢追求型」「モラトリアム型」などのタイプがあることを明らかにした。このようなマクロな視点でのフリーター像が明らかにされつつある中で、本研究ではフリーター個人が、自分の人生の流れの中で、働くことがどのようなものとして自分の中に存在し、影響を及ぼしているのかをというミクロな視点での考察を試みることとした。

これらのことから、本研究では、インタビューという

方法を用いてフリーター個人が働くことについてどのような意識を持ち、労働上の決定をしているのかという「主観的労働観」にせまったく。そこでは特に正社員かフリーターかという労働形態の選択に注目した。それにあたり、個人の労働に関わるライフストーリーに焦点を当てることとした。ライフストーリーとは、ライフヒストリー（生活史）の語りの部分であり、当該の人生の史的事実よりも、本人の人生に対する解釈を重視する（Mann, 1992）ものである。本研究ではこれを「個人史」として扱い、その中で主観的労働観はどのようなプロセスを辿るのか、そしてそこに影響する要因は何なのかを検討した。

II 方 法

対象：19歳～28歳までの、自称フリーター10名（男性5名、女性5名）を対象とした。そのうち3名は筆者の友人であり、残り7名は筆者の知人から紹介された者であった。

期日：2001年3月下旬～10月下旬にかけて半構造化面接（以下、インタビュー）を行った。

インタビューの手続き：調査は1人あたり約1時間を目安とした。始めにフェイスシートに個人属性などを記入してもらい、その後にあらかじめ用意した質問項目に適宜沿ってインタビューを行った。なお、場所や時間においては対象者が指定した所へ筆者が出向く形をとった。あらかじめ用意した質問項目は、日本労働研究機構（2000）の『フリーターの意識と実態—97人へのヒアリング結果より一』に用いられたものを参考にした。大まかには、①学校を離れてからの経緯、②職場から得たもの、③職場での悩み、④正社員ではなくフリーターになった理由、⑤家族について、⑥アルバイトを選ぶ基準や理想の人生、⑦将来展望、であった。特に①と④のフリーターになるまでの経緯や理由、そしてフリーターとして働く中で、対象者がどのような将来展望を抱いているのかという⑦に焦点を絞ることにより、個人史に注目したインタビューを進めていった。また、対象者の了承を得て、インタビューを録音した。

分析の手続き：インタビューを録音したものと逐語化したものとデータとして用い、語っている内容や意味に焦点付けて質的分析を行った。具体的には、まず、対象者が就学を終えた時期から将来の展望に至るまでに起こっ

た労働に関する出来事を時系列順に並べ、それに至った経緯や思い（主観的労働観）を語りの中から抽出し、1人あたり1枚の紙に図示した。その図を基盤として、主観的労働観のプロセスや、それに影響を及ぼしていると考えられる要因を逐語録の中から対象者ごとに挙げていった。

III 結果と考察

対象者の個人史に焦点を当てるという、ミクロ的な考察をする中で、一見矛盾するようではあるが、主観的労働観のプロセス、そしてそれに影響する要因、正社員経験の有無が関係する正社員希望の意味、というフリーターをみる上での大枠の視点ができあがった。しかし、そのような大枠の視点で個人を当てはめるという作業は、より一層個人の違いや独自性を際立たせる結果となつたといえる。

1. 主観的労働観のプロセス

フリーターと正社員の選択において、どちらを志向しているのかという視点を中心に、①フリーターになる前、②フリーターをしている現在、そして③今後の展望という時期ごとで語りをまとめた結果、ある時期ごとに主観的労働観が変化していく者と一貫し続ける者とに分けられた。変化していくといつても、そこには様々な変化過程があり、フリーター志向から正社員志向になつた者（3名）、正社員志向からフリーター志向になり、その後、また正社員志向となる者（2名）、正社員志向からフリーター志向になつた者（1名）とに分けられた。また、同じような変化をたどる者同士であっても、志向の強さやその理由においては対象者によって異なつた。同様に、一貫し続けたタイプにおいても、正社員志向のままの者（1名）、フリーター志向のままの者（1名）、フリーターや正社員といった労働形態では説明しにくいが、ある視点で一貫する者（2名）とに分けられ、何が一貫しているのかで一人一人異なつていて。ここでいえるのは、労働観とは変化するにせよ、一貫するにせよ、そのプロセスが一人一人それぞれに存在することである。そのことは、個人史というライフストーリー、つまりその人の歴史の物語に耳を傾けたことから見えてきたことであるといえる。

2. 主観的労働観のプロセスに影響する要因

しかし、そのプロセスに個人の独自性を生み出しているものは何なのか。何が彼らに影響を及ぼしたために、主観的労働観は変化したのか、もしくは一貫したのであ

ろうか。そのような点に注目して、逐語記録を分析した結果、次の3つの影響要因が抽出された。

1つは「自分」であり、2つ目は家族や友人を含む「他者」であり、もう1つは「外的な環境とそこにおける経験」であった。「自分」とは、逐語の中でみられた個人の欲望や価値観などを扱った。「他者」とは、家族や友人などの直接の関わりもあれば、対象者が抱く他者像も含まれた。「外的な環境とそこにおける経験」とは、店の撤退など避けられないものもあれば、個人の視点からみた主観的な外的環境も含まれている。これらの要因をみていくと、個人によってその影響要因の種類や、影響を受ける強さにおいて異なつてることが分かった。

3. 正社員経験者とそうでない者の違い

個人史に注目して主観的労働観のプロセスをみると、大きな労働経験である正社員を経験した者とそうでない者とでは、「正社員希望」という将来の展望の労働形態は同じであるが、そこへの意識の中身において違いがあることが分かった。つまり、正社員希望への明確な理由や、イメージの点で異なるということである。おそらくそれは、正社員経験者は、一度正社員を経験したことが背景となって、フリーターと正社員との違いを体験的に意識することができるため、そこに明確なイメージや理由を持つことができるが、一方、そのような経験がないフリーターは、実感として正社員というものをイメージすることができず、希望する理由も明確にならないと考えられた。

このように、正社員経験者とそうでない者とに違いがあった点から、今後の労働観の研究の課題として、正社員とフリーターの労働観を比較することが取り上げられる。それは、働き始める参入期という時間軸に正社員経験者を戻してみると、よく分かる。正社員を経験した者が、就学期を終えて、いよいよ働き始めるという参入期において正社員となった理由は、一般的な価値観からのものであり、そこに明確な理由は持っていないかった。それに対し、フリーターから働き始めた者は、その理由として、正社員経験者が語っていたような、明確な理由もなく正社員になるのはナンセンスであるという思いを持っているものが多い。ここから一つ言えることは、個人が働き始める参入期において、「フリーターか正社員か」という労働形態を選ぶ際に、なかなかその実体像のイメージが持ちにくいために、社会の一般的な価値観に流されたり、自分の独自のイメージに縛られたりする可能性が高いということが仮説として挙げられよう。